

宋代西廂故事と蘇軾：趙令時「商調蝶恋花」をめ ぐって

黄, 冬柏
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9670>

出版情報：中国文学論集. 24, pp.47-64, 1995-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

宋代西廂故事と蘇軾

——趙令時「商調蝶恋花」をめぐって——

黄 冬 柏

はじめに

崔鶯鶯と張生の恋愛を題材とする西廂故事は、唐代伝奇小説「鶯鶯伝」から元代雜劇「西廂記」に至るおよそ五百年の間、調笑転踏、鼓子詞、諸宮調、話本小説、あるいは戯曲等に仕組まれて、まさしく中国の俗文学史の一端を支え続けて来たと言える。この「鶯鶯伝」から「西廂記」までの文学史を考える時、その中間に当る宋代は、中国俗文学の発展の重要な時期でもある。ただ残念なことに、現存する前掲作品が少なく、かつ関連資料に乏しいことによって、従来あまり研究されて来なかつたように思われる。

本稿では、北宋文壇の盟主である蘇軾と宋代西廂故事の繋がりについて考察し、蘇軾の門下生である秦觀、毛滂等の西廂故事に取材した作品、特に趙令時の「商調蝶恋花」をめぐって、蘇軾と彼ら文人たちとの交遊関係を見ることによって、蘇軾が宋代に於ける西廂故事の流伝の中にどのような役割を果たしたか、また「商調蝶恋花」という作品が西廂故事の演変の中にどのような地位を占めるかについて検討してみたいと思う。

—

まず西廂故事の成立および宋代に於ける西廂故事の流伝と蘇軾の役割を概観しておこう。

宋代西廂故事と蘇軾（黄）

崔鶯鶯と張生の恋愛を題材とする西廂故事は、周知の如く、唐の元稹（字微之、七七九—八三一年）の伝奇小説「鶯鶯伝」に源を発する。その故事の梗概は次の通りである。

唐の貞元年間（七八五—八三四年）、当時一介の書生であった張生は蒲州に遊び、普救寺に宿泊し、たまたま彼の母の姉妹「崔氏孀婦」及び娘の鶯鶯と居合わせる。折しもそこで兵乱に遭遇し、危難が崔氏母女に及んだが、幸い張生の尽力によって彼女らは助けられた。その恩に報いようと思った張生を招くが、席中、鶯鶯の美貌に、張生はすっかり心を奪われてしまう。その後、鶯鶯の婢紅娘に頼んで意を伝え、双方漸く心が通じて所謂西廂の交わりが始まるが、やがて張生は試験のために長安に赴き、落第したので、そのままに留まることになる。その間に手紙のやりとりがあり、悲歎に暮れる鶯鶯は変らぬ深情を伝えたが、やがて張生は鶯鶯との関係を断つてしまう。のち鶯鶯は人妻となり、張生は別に妻を迎える。

「鶯鶯伝」は唐代伝奇小説中の佳品として中国文学史に多大な影響を及ぼした。その理由は、のちに千古の名劇「西廂記」の源になったからであるが、宋代にあつてこの「鶯鶯伝」は、北宋初の太平興国二年（九七七年）、太宗の勅命によつて、李昉等が編した小説集『太平広記』巻四百八十八雑伝記中に収められていた。該書は三百四十四種類の書籍から引用した、漢から五代に至る野史、伝奇小説の一大集成であるが、太平興国三年八月に奉呈の後、印刷に及ばず、雕版が太清楼に蔵せられたまま、館閣文人など少数の人々しか見ることができなかったと言われる。

蘇軾（字子瞻、号東坡居士、一〇三六—一一〇一年）は、卓抜した文藻をもつて、北宋文壇の盟主として、當時の文学の各ジャンルに巨大な貢献をした人物である。彼はまた西廂故事の流伝と発展についても重要な役割を果たしたと考えられる。というのは、先の太清楼に蔵された『太平広記』を実見したと思われることや、実際に彼自身の詩詞中に西廂故事に直接言及した作品が散見されるからである。さらに面白いのは現存する宋代の西廂故事に取材した作品がすべて彼の門下生、あるいは彼と密接な関係にある文人たちが作ったものに限られるということである。以下の詞句が「鶯鶯伝」に拠つて作られたと見られる蘇軾の作品である。

① 「南歌子」詞：「美人依約として西廂に在り」¹⁾

② 「雨中花慢」詞：「月を待つ西廂」²⁾

③「定風波」詞：「郎の為に憔悴して却って郎を差う」³⁾

④「張子野年八十五、尚聞買妾、述古令作詩」詩：「詩人老い去りて鶯鶯在り、公子帰り来りて燕燕忙し」⁴⁾

このうち③の詞句は「鶯鶯伝」からそのまま襲用したもので、また④詩について、宋人王楙の『野客叢書』巻二十九は、「張子野晩年に愛姬多し、東坡詩有りて曰く：「詩人老い去りて鶯鶯在り、公子帰り来りて燕燕忙し」とは正に当家の故事を用ゐるなり。案ずるに唐の張君瑞、崔氏女と蒲に於いて遇ふ、崔は小名鶯鶯、元稹と李紳とそ
の事を語り、「鶯鶯歌」を作る。」と述べている。以上の如く、蘇軾は『太平広記』に収められる「鶯鶯伝」を見し、その影響を受け、格別の関心をもって自己の詩詞中に引用していたようである。

さて、当時文壇の領袖の地位にあつた蘇軾は、その門下に、全国的に幅広い後輩の文人芸術家を結集させていた。明の胡應麟『詩藪』巻五雜編に、「黃魯直、秦少游、陳無已、晁無咎、張文潛、唐子西、李芳叔、趙德麟……皆東坡に従ひて遊ぶ者なり。」とある。このうち「從東坡遊者」には二十三人を挙げ、また「与東坡善者」として十八人の名前を並べている。所謂「蘇門四学士」⁵⁾、「蘇門六君子」⁶⁾はその中から形成されたのである。北宋の時代、才子佳人式の男女愛情を反映した西廂故事は、当時の知識人達の理想像に合致し、大いに興味を惹く対象であつたと思われる。特に蘇軾の影響は大きく、その門下に文人集団を形成したが、彼らは屢々この故事を話題とし、また筆端に付している。以下には、蘇軾の門下生とされる秦觀、毛滂、特に趙令時の西廂故事に取材した作品をめぐって具体的に述べてみようと思う。

二

宋代において現存する西廂故事に取材した作品といへば、まず秦觀と毛滂の「調笑転踏」がある。秦觀（字少游、一〇四九—一一〇一年）は、熙寧十年（一〇七七）徐州で蘇軾に文才を認められ、さらに元祐初年、賢良方正を以て朝廷に出仕し、官は太学博士、国史院編修官に至る、いわゆる「蘇門四学士」の中心人物である。特に蘇軾は『秦少游真贊』（『蘇軾文集』巻二十一）という賞辞を残している。秦觀の詞は婉約の典型といわれるが、古代の

美人を詠じる「調笑軼踏」(『淮海居士長短句』卷下)もこういった婉約の美しさを表現した作品である。秦觀の「調笑軼踏」は全部で十首、それぞれ王昭君、樂昌公主、崔徽、無双、灼灼、盼盼、鶯鶯、採蓮、煙中怨、離魂記と題するが、そのうち第七首「鶯鶯」は西廂故事の女主人公崔鶯鶯を詠じるものである。

崔家有女名鶯鶯
名は鶯鶯

未識春光先有情
未だ春光を識らざるに 先ず情あり

河橋兵亂依蕭寺
河橋の兵亂に蕭寺に依り

紅愁綠慘見張生
紅愁綠慘にして 張生を見る

張生一見春情重
張生一たび見て 春情重し

明月拂牆花樹動
明月 牆を払ひて 花樹を動かす

夜半紅娘擁抱來
夜半 紅娘に擁抱され來たり

脈脈驚魂若春夢
脈脈として 魂驚かして春の夢の若し

春夢 神仙洞
春の夢か 神仙の洞か

冉冉拂牆花樹動
冉冉として 牆を払ひて 花樹を動かす

西廂待月知誰共
西廂に月を待つ 知らん 誰と共にかせん

更覺玉人情重
更に玉人の情重きことを覺ゆ

紅娘深夜行雲送
紅娘 深夜に行雲を送りて

困鞞釵橫金鳳
困鞞て 釵に金鳳横たふ

また「調笑軼踏」は、同じく蘇軾の門下生である毛滂(字沢民、号東堂、一〇五五——一一二〇年)にも作品がある。毛滂は、元祐四年(一一〇八九)に蘇軾が杭州の守となった時の法曹で、その詩才を深く重んじられ、後、朝廷に薦められて秀州の知となった人物である。『蘇軾詩集』卷三十一の中に「次韻毛滂法曹感雨」という詩が見える。毛滂の「調笑軼踏」(『宋名家詞』第一集第八冊『東堂詞』)には、それぞれ崔徽、秦娘、盼盼、美人賦、灼灼、鶯鶯、苕子、張好好が詠じられている。その第六首「鶯鶯」は次の通りである。

春風戸外花蕭蕭

緑窓繡屏阿母嬌

白玉郎君恃恩力

樽前心醉雙翠翹

西廂月冷濛花霧

落霞零亂墻東樹

此夜靈犀已暗通

玉環寄恨人何處

何處 長安路

不記墻東花拂樹

琴理罷霓裳譜

依舊月窗風戸

薄情年少如飛絮

夢逐玉環西去

春風 戸外にふき 花 蕭蕭たり

緑窓 繡屏 阿母 嬌し

白玉の郎君 恩力を恃んで

樽前 心に酔ふ 双の翠翹

西廂 月冷やかに 花霧濛たり

落霞 零乱す 墻東の樹

此の夜 靈犀 已に暗に通りて

玉環 恨みを寄す 人 何れの処ぞと

何れの処 長安の路

記えず 墻東に花樹を払ふを

琴 理め罷む 霓裳の譜

依旧なり 月窓 風戸

薄情の年少 飛絮の如し

夢 玉環を逐ひて 西に去る

この秦観と毛滂の作品は「転踏」という形式を採用したものである。「転踏」とは宋代の歌舞曲であり、七言律詩一首と「調笑令」詞一首とを組み合わせて、古代の美人の故事を詠じる楽曲である。詩の最後の二字と詞の最初の二字を繋ぎ、また「調笑令」という詞牌を用いることから、「調笑転踏」と称されるものである。通常八つの故事を一套とする。ところで、秦観と毛滂が作った「調笑転踏」の内容は小説「鶯鶯伝」の範囲を超えるものではない。しかも「転踏」というジャンルの制限によつて、作者は七言律詩と小令詞のみで故事を詠じなければならず、「鶯鶯伝」中の一つのプロットを詠じるのが精一杯であったのであろう。西廂故事全体を叙述することは到底不可能だったと考えられる。

とはいえ、社会の発展及び文人価値観の変化に伴い、この二つの「調笑転踏」は、その主題において原作「鶯鶯

伝」に比べて明確な進歩を示している。例えば「鶯鶯伝」中の「時人多く張生に許して善く過ちを補う者と為す」という言葉に対する毛滂の反発などは、その一例である。すなわち「調笑転踏」中で「薄情の年少飛絮の如し」と張生を批判し、その負心棄義の行為に対して不満の気持ちを表明し、これを否定しているのである。

宋代においては、物質生産の発展と商品経済の繁栄及び市民階層の形成につれて、社会発展の需要に応じる一つの新しい文化——市民文化が形成され始める。なかでも「瓦子」（「瓦肆」或いは「瓦舍」とも称される）や、「勾欄」においてくりひろげられた娯楽文化が当時の都市で盛んになっていった。『東京夢華録』巻二によると、汴京（今の河南省開封市）の東角楼街周辺だけでも「街の南に桑家瓦子、北に近ければ則ち中瓦、次里瓦。其の中に大小勾欄五十余座」などがあったという。こうした当時の盛り場を中心とした文化は、南宋に至って更に繁栄し、『夢梁録』巻十九「瓦舍」の中に臨安（今の浙江杭州市）の盛況が記載されている。かかる規模の大きな娯楽文化の繁栄に伴って、通俗文学（特に講唱文学）は大いに発展していった。そこでは、様々なジャンルの文学が相互に影響し合うこととなり、人気のある故事があれば、同じ題材を雜劇、説話、院本、諸宮調などといった異なる芸能形式よって上演することも行なわれたのである。

こうした社会風気と文化条件を背景として、西廂故事は広く伝播していったと考えられる。蘇軾は文人集団を形成したが、その文人達の多くは、娼妓ともよく詩のやりとりなどをしており、また「瓦子」、「勾欄」などといった民間娯楽の場所にも度々顔を出すなど、庶民階層と深いつながりを持っていた。西廂故事も、かかる状況の下に広く民間に受け入れられていったのである。北宋の羅燁『醉翁談録』巻一「小説開辟」に、当時「鶯鶯伝」が卓文君、李亜仙、惠娘傀儡、王魁負心、唐輔采蓮などの故事と並んで、説話人によってよく上演された伝奇小説であったと記している。また南宋の周密の『武林旧事』巻十の中に「鶯鶯六么」という官本雜劇の題目が見えるのも、同様の状況を説明するものと思われる。ただ残念なことに、これらの作品は現存していないのである。

以上の如く、西廂故事は文人士大夫達のサロンでの話題となり、彼らの創作の題材となったにとどまらず、都市文明の発展と市民文化の勃興に伴い、通俗文学の描く対象として民間に上演され、そして広く人々に受け入れられることとなった。では、西廂故事の当時の民間における流伝の具体的な状況を知ることとは、全く望むべくもないの

であろうか。即ち、この欠落を補うものとして、本稿が以下に取り上げる趙令時の「商調蝶恋花」の存在は、極めて重要な意義を持つものとなる。この「商調蝶恋花」について、王国維は『戲曲考源』（『王觀堂先生全集』冊十五）において、「伝ふる者は惟趙德麟の「商調蝶恋花」、「会真記」の事凡そ十闕を述べ、並びに原文を曲前に置き、又一闕を以て起し、一闕を以て結ぶ。後世戲曲の格律に視ぶれば具体にして微なるに幾し。」と評している。北宋の文人趙令時が民間講唱文芸の鼓子詞というジャンルを採用し、小説「鶯鶯伝」の基本的なプロットをもとに新たに創作した「商調蝶恋花」は、後世の戯曲に深く影響を及ぼしたのである。

しかし、「商調蝶恋花」とその作者趙令時については、まだその研究は十分にはなされていないように思われる。「商調蝶恋花」については、中国ではまだ註釈がなく、日本でも翻訳文がない。また管見に入った限り、この作品に関する専論も見当たらない。「西廂記」に関する専著あるいは中国戯劇史の中ではしばしばこの作品について触れられているけれども、具体的には未だ深く分析されていないのが実情と言えよう。このような状況を招いている大きな理由には、直接的な関連資料が極めて少ないということが考えられる。従って、「商調蝶恋花」そのものを深く理解するためには、関連資料を可能な限り広く集めることがまず必要であろう。そこで以下では、趙令時本人の伝記、及び彼と蘇軾との関係について考察することにより、「商調蝶恋花」成立の背景を検討してみたいと思う。

三

才人の多出する北宋の文壇においては、趙令時はさほど有名な文人とは言えない。また彼の伝記資料も次のようにいづれも断片的なものである。『宋史』巻二百四十四宗室伝には、「令時、字は德麟、燕懿王の玄孫なり、早く才敏を以て聞こゆ。元祐六年（一〇九一）、簽書額州公事となり、時に蘇軾守たり、其の才を愛で、因って朝に薦む。」と記録されている。また、『宋史新編』巻六十一、『宋詩紀事』巻八十五、『宋元学案補遺』、『元祐党籍碑姓名考』、『四庫提要弁証』などの書籍中にも趙令時に関する伝記資料が見えるが、内容はいづれも『宋史』の記述範囲を超えるものではない。

現在、生没年および彼の著作に關しての考証である『全宋詞』の付伝によると、趙令時は、皇祐三年（一〇五一）宋太祖趙匡胤の次男德昭の玄孫として生まれ、紹興四年（一一三四）八十三歳で亡くなったとされる。彼はその才能を蘇軾に認められ、少なからず官職を歴任したことがあるが、巡り合わせ悪く、結局中央官界での栄達は実現せず、晩年零落し、その死に当っては葬礼も叶わぬ極貧の状態であったということである。趙令時の生涯の事跡については、史籍中にあまり記載されていなかったが、他の宋人の專集及び筆記中に、その幾つかが散見される。例えば、范祖禹『范太史集』卷五十五、『張耒集』卷五十四、周必大『文忠集』卷十六、朱熹『朱文公文集』卷八十一および徐度『却掃編』卷下などの中に、趙令時の文才、官吏としての能力及び人格について、これを高く評価する文章が見られる。なかでも、「蘇門四学士」の一人である張耒の「書趙令時字説後」によると、蘇軾が紹聖（一一〇九四—一〇九七）初年に惠州、澹州へ左遷された時、趙令時は危険を恐れず、蘇軾の「遺墨余稿」を珍藏した。こうしたことに対して、張耒は彼を篤く尊敬し、また賞賛したのもであった。

趙令時は官途において不遇のままであったが、宗室出身の文人として、彼独自の経歴とすぐれた文才を持ち、後世に少数ながらも優秀な文学作品を残している。現存する彼の作品は、『侯鯖録』八卷のほか、宋人曾慥『樂府雅詞』中の詞十二首、また趙万里『校集宋金元人詞』中の詞三十六首、そして『全宋詞』と『宋詩紀事』中に詞三十七首、詩五首、および断句二首を見ることが出来る。このように、宗室出身の文人趙令時の生涯の事蹟については、史籍に記載される資料が乏しいにもかかわらず、同時代および後世の文人学者の著作中に記録され、しばしば高い評価が見られるのである。

趙令時の経歴において最も注目される点は、彼と大文豪蘇軾との密接な関係である。このことは、彼の文学創作にも大きな影響を与えたと思われる。さきにも述べたとおり、蘇軾は西廂故事の伝播において、重要な役割を果たす存在である。具体的には、当時西廂故事を題材として創作された「調笑軼踏」と鼓子詞の作者が、いずれも彼の門下の文人であり、また年齢においても、蘇軾は秦觀の十二歳年長、毛滂の十九歳年長、趙令時の十五歳年長であり、官人としての身分からも、蘇軾はすでに彼らに十分な影響を及ぼし得たと考えるべきである。

趙令時と蘇軾との密接な交流は、元祐六年から七年の間に行われる。元祐六年（一〇九二）七月、五十六歳の蘇

軾は竜閣閣学士をもつて潁州（今の安徽省阜陽県）の知となり、その時趙令時は承議郎をもつて潁州の簽官となつた。二年前蘇軾が杭州の知となつた時、趙令時は彼の屬官として勤めたことがあり、再度一緒に仕事をしようとしたのである。蘇軾の趙令時の才能に対する賞愛は深く、彼の字を景貺から德麟に改めさせ、自ら「趙德麟の字の説」という一文を書き、この中に彼を次のように評価している。「其の人と為りを得れば、博学にして文あり、篤行にして剛、道を為して信、政を為して敏、予おもへらく杞梓の用、瑚璉の貴有り。將に必ず天下に顕聞するべく、特に佳公子なるのみに非ず」。即ち趙令時が無智無能の皇族公子でなく、人柄、才智ともによつて、前後二度にわたつて朝廷に彼を推薦しようとしている。元祐七年（一〇九二）五月、蘇軾は竜閣閣学士知潁州の身分で「宗室令時を薦むるの状」（『蘇軾文集』卷三十四）という上奏書をたてまつつた。その後、兵部尚書においても、また「再び趙令時を薦むるの状」（『蘇軾文集』卷三十七）を上奏した。この二篇の奏疏の中、蘇軾は西周から唐代に至るまで、歴代皇室の才士が国家の繁栄に貢献したという事例を陳述し、しかも宋代の状況を結び付けて述べ、朝廷の「国を理め、民を治むるは宗子に及ばず」という古い規則を廃止し、趙令時のような宗室中の人材も才能を登用させるべきだと提案した。結局、蘇軾のこの推薦は通らず、趙令時の中央官界での栄達は実現しなかつた。裏付ける資料は現在のところ見当らないが、あるいはこのことによる挫折が、趙令時をしていよいよ「商調蝶恋花」の創作に向かわせた一因となつたのではないかと考えられる。

一方、文学創作の方面でも蘇軾の影響は当然大きかつたはずである。というのは、文人士大夫の間における交遊酬唱は、唐代において、「鶯鶯伝」と「鶯鶯歌」など伝奇小説と詩との密接な關係から窺われたが、宋代もこの風習は引き続がれてきた。従来より、歐陽脩、蘇軾らが文壇の盟主として、その当時の文学の發展に大きな役割を果たしたことは周知の事実である。当時、潁州には、趙令時、潁州州学教授陳師道、および歐陽脩の二人の息子歐陽叔弼、歐陽季黙らが在任していた。潁州の周困は、山林名勝などが少なく、蘇軾はもっぱらこれらの人々とともに酒を飲んだり、詩を作つたりして余暇を過ごすのが常である。蘇軾の生涯において地方官として潁州に勤めた時間は非常に短かつたものの、残された作品数がかえつて非常に多かつた理由の一つはここにある。この約半年の間に、

蘇軾が趙令時に与えた贈答詩は二十首あまり（『蘇軾詩集』卷三十四、卷三十六）を数える。

ところで、趙令時の詩は『宋詩紀事』中に僅かに五首しか残されておらず、蘇軾の詩に唱和した趙令時の作品は見えない。しかしながら、趙令時の『侯鯖録』には、当時彼と蘇軾が詩のやり取りをしていたことを窺わせる多くの記事を見出すことができる。また、二人の密接な間柄については、宋人周南『山房集』¹⁰卷八などの間接的資料も存在し、よって、蘇軾と趙令時の潁州における親密な交遊が存したことは、十分に確かめられるのである。

宗室出身の一人の官僚として、趙令時は、あまり伝記資料が残されていないが、北宋文壇の一人の文人として、彼は蘇軾との親密な交遊酬唱があった。このことは、彼の文学創作の上でも、大きな影響を与えたにちがいない。

「商調蝶恋花」の成立時期について、久保得二氏は「元祐の後、靖康の前」¹¹（即ち一〇九五——一二五の間）と推測されているが、趙令時の『侯鯖録』と蘇軾詩文作品及び宋人筆記などを全面的に考察すると、更に元祐年間に蘇軾らと交遊関係にあった以後、この作品を作ったと思われる。また、晩年に京官になったという趙令時の経歴を関連づけて見ると、蘇軾の影響を受けた後、彼は「鶯鶯伝」に対して強烈な興味を抱き、そのうえ、京城の「瓦子」、「勾蘭」で当時上演されていた講唱文学作品を参考としながら、「商調蝶恋花」を創作したと推測される。従って、「商調蝶恋花」は作者の比較的晩年の、しかも都汴京での作品ではないかと考えられるのである。

四

趙令時の「商調蝶恋花」は、『侯鯖録』¹²卷五に収められている。「商調蝶恋花」を作る前に、彼は「鶯鶯伝」及び元稹本人について深く考証し、「弁伝奇鶯鶯事」と「微之年譜」を書いていく。この二篇の文章の中で、彼は「鶯鶯伝」の主人公張生が即ち元稹（字微之）本人であるところを、作品の正式名称も張生、崔鶯鶯ではなく、「元微之崔鶯鶯商調蝶恋花詞」としている。ところで、趙令時はなぜ「鶯鶯伝」に対してこのように強烈な興味を抱いたのか。「商調蝶恋花」を作る目的は何だったのだろうか。

「商調蝶恋花」の冒頭に、彼はその当時の西廂故事の流行の状況を記述している：「至今い士大夫＊極めて幽玄を語

り、奇を問ひ、異を述べ、此を挙げて美談と為さざるは無し、倡優女子に至りては、皆能く大略を調説す。惜しいかな、之に被るに音律を以てせず、故に之を声楽に播し、之を管絃に表わすこと能わず。」このように、趙令時は当時民間に流行していたのが「鶯鶯伝」の大略であつて、その西廂故事の全部ではなかつたことを指摘し、その原因を、楽曲がついてなかつたことに求めている。一方、「鶯鶯伝」の内容そのものについても、彼は不満があつた。「世間には張生がよく過ちを償つたと認める者も多かつた」という結末の部分をすっかり削り去り、一方で自分の感想をも織り込みながら、「蝶恋花詞」十二首を作つた。かくして、西廂故事は、はじめて楽曲に支えられることとなり、また故事全体が一つの作品におさめられたわけである。その結果、多くの人々が共感する形式をととのえ、民間に広く流布するにいたつたと考えられよう。

趙令時の「商調蝶恋花」は十二節から構成され、それぞれの節は語りと歌の二つの部分に分かれる。まず散文部分である語りを見ると、冒頭の第一節と結末の第十二節を除いた、第二節から第十一節は、すべて原作「鶯鶯伝」を簡潔に述べたものである。一方、韻文部分である歌は、即ち作者が自分で作つた「蝶恋花詞」十二首であり、全て語りの後の、最初の一首は「歌伴を奉勞し、先づ格律を定め、後に無詞を聴け」、以後の十一首は各々「歌伴を奉勞し、再び前声を和す」という言葉をうけてそれぞれ歌われている。

ところで、「商調蝶恋花」を含む鼓子詞という形式は宋代民間に流行した講唱文学の一形式である。これは、まず散文で内容を概述し、続いて韻文で物語りを唱つて、語りと歌（即ち散文と韻文）を交互に組み合わせて観客に語りかけ、太鼓やその他の管絃楽器の伴奏とともに韻文の詞曲を唱つてゆくものであつた。鼓子詞に於いては、韻文部分である歌がが作品の主体である。「商調蝶恋花」の韻文部分は趙令時が作つた十二首「蝶恋花詞」になつてゐるので、これを中心に深く具体的に分析することが必要だと考えられる。紙幅の都合上、十二首のうち八首を挙げることにする。

①麗質仙娥生月殿 謫向人間

未免凡情亂 宋玉牆東流美盼

麗質の仙娥 月殿に生まるるも 人間に謫せられて
未だ凡情に乱さるるを免かれず 宋玉 牆東に美盼を流し

宋代西廂故事と蘇軾（黄）

亂花深處曾相見 密意濃歡方有便

亂花深き処 曾て相見ゆ 密意濃歡 方に便あるも

不奈浮名 旋遣輕分散

浮名を奈ともせず 旋遣せられて輕がろしく分散し

最恨多才情太淺 等閑不念離人怨

最も恨む 多才にして 情 太だ淺く 等閑に離人の怨むを念はざるを

第①首は、作者の創作部分である「前言」の直後に詠じられるものである。「前言」には、「鶯鶯伝」の流伝情況と「商調蝶恋花」創作の目的及び過程が述べられている。そこで、第①首はこれに対応して、西廂故事の大意を概括し、また自分の感想を付け加えている。仙女のような美しい鶯鶯は書生張生と出会い、二人は互いに一目ぼれをしたものの、張生はたとえ「密意濃歡」の關係をつづけながらも、「浮名」の誘惑に耐えられず、一方的に鶯鶯を遺棄した。このような張生の態度に対して、作者は「最も恨む多才にして情太だ淺く、等閑に離人の怨を念はざるを」といって、その薄情を批判するのである。

② 錦額重簾深幾許 繡履鸞鸞

錦額 重簾 深きこと幾許ぞ 繡履 鸞鸞として

未省離朱戸 強出嬌羞都不語

未だ朱戸を離るるを省ず 強ひて嬌羞を出だすも 都て語らず

絳綃頻掩酥胸素 黛淺愁深妝淡注

絳綃もて頻りに掩ふ 酥胸の素きを 黛淺く 愁ひ深く 妝淡く注ぎ

怨絕情癡 不肯聊回顧

怨絶え 情癡りて 聊かも回顧するを肯せず

媚臉未勻新淚汚 梅英猶帶春朝露

媚臉 未だ勻はず 新淚の汚 梅英 猶ほ帶ぶ 春朝の露

「商調蝶恋花」の第二節から第十一節までの散文部分は前述の通り「鶯鶯伝」に基づいて改編されたものである。散文部分に対応する十首の「蝶恋花詞」はそれぞれ散文の故事と呼応し、人物と物語を抒情的に詠じている。

まず、第②首では「嬌羞」、「怨絶」の氣質と「愁深」、「情癡」の性格を持つ崔鶯鶯が描かれる。これは、散文中に登場した彼女のイメージとも一致している。鶯鶯は「深沈矜恃、善良鍾情」の特徴を備えると同時に、「孤僻怯弱」の一面をも有していた。まさにこの二重の性格が、「媚臉未だ勻はず新淚の汚」という情況を生み出し、彼女は、最後に棄てられた運命に直面する時になっても、ただ我慢するしかないことになるのである。

④ 庭院黄昏春雨霽 一縷深心

庭院の黄昏 春雨霽れ 一縷の深心

百種成牽繫 青翼慕然來報喜

百種に牽繫を成す 青翼 慕然として 来たり喜を報じ

花牋微論相容意 待月西廂人不寐 花牋に微かに 相ひ容るるの意を論し 月を西廂に待ちて 人 寐ねず

簾影搖光 朱戸猶慵閉 簾影の揺晃 朱戸 猶ほ慵く閉づ

花動拂牆紅萼墜 分明疑是情人至 花動きて牆を払ひて 紅萼 墜ち 分明に疑ふらくは 是れ情人の至る

ならん

第③、④首は張生の形象を描写した詞である。鶯鶯と出会ってから、張生はすっかり心を奪われ、「寝を廢し餐を忘れて思想遍く」、「一縷の深心、百種に牽繫を成す」という具合である。また「春詞の一紙」を書き、鶯鶯から返事である《明月三五夜》という詩をもらった時には、彼は狂わんばかりに喜ぶ。「花動きて牆を払ひて紅萼墜ち、分明に疑ふらくは是れ情人の至るならん」という言葉は、彼のこの様な気持ちを描写しているのである。以上のような生き生きとした、また多少の誇張を含む描写は、張生の鍾情の激しさを表現すると同時に、反面、彼の軽率さと薄情さという性格をも際立たせている。従って、西廂で出会った時、鶯鶯に「恣に多情を教む」と非難された後、張生の気持ちは希望と喜びから一気に絶望と苦しみへと変ってしまうのである。第⑤首では、感情と風景との対比によって、張生のこうした激しい感情の激変が描き出される。「恰に春宵に到れば、明月三五に当つ」という美しい景色の中に、張生は「惆悵として空しく回りて誰と共に語らん、只だ心化して朝雲と作りて去るべし」と気持ち落ち込ませてゆくのである。しかし、張生が「正に是れ断腸癡望の際」にある時に、意外にも「雲心嬌娥に捧げ得て至る」。かくして、張生と鶯鶯、この才子佳人のカップルは漸く楽しい西廂の交わりをなすことになる。第⑥首はこの美しい夢のような西廂の会を詠むものである。

⑥ 數夕孤眠如度歲 將謂今生 數夕の孤眠 歳を度るが如し 將に今生を謂へば

會合終無計 正是斷腸癡望際 終に計無し 正に是れ断腸 癡望の際

雲心捧得嬌娥至 玉因花柔羞投淚 雲心 嬌娥に捧げ得て至る 玉因の花柔 羞じて涙を投ひ

端麗妖嬈 不與前時比 端麗なる妖嬈 前時に比せず

人去月斜疑夢寐 衣香猶在妝留臂 人去り 月斜にして 夢寐に疑ふも 衣香 猶ほ在りて 妝 臂に留む

樂しみ極まりて哀情多しというように、第⑦首からは、崔、張の愛情故事の悲劇性の発展過程が徐々に示されて

ゆく。「両意相歡ぶ朝又暮」の中にひたるこのカップルは、張生が功名心に駆り立てられることによって、別れの時を迎えることになる。第⑦、⑧首はこの「離愁悽咽の処」という別離の場面を言葉尽くして描き出す。「離情盈抱して終ひに語る無し」、「絃腸俱に断たる梨花の雨」という言葉が重ねられてゆく。

⑧碧沼鴛鴦交頸舞 正恁雙棲

又遣分飛去 灑翰贈言終不許
授琴訴盡奴心素 曲未成聲先怨慕

忍淚凝情 強作霓裳序

彈到離愁悽咽處 絃腸俱斷梨花雨

第⑨首は「別後の相思心目乱れ」という二人の思いを述べた詞である。張生は「忽ち南來の雁に寄す」とはいうものの、心中では鶯鶯を見棄てていた。一方、鶯鶯は変らぬ恋情を抱きながらも、「幽会未だ終らざるに魂已に断たれ」という結末を迎える。作者は遺棄された鶯鶯の悲劇的な運命に大いに同情し、第⑩、⑪首中に鶯鶯の憔悴と絶望の様子を述べ写し、かくして「情深くして何ぞ情の俱に浅きに似ん」という不満の声を上げるのである。

⑨別後相思心目亂 不謂芳音

忽寄南來雁 却寫花牋和淚卷
細書方寸教伊看 獨寐良宵無計遣

夢裏依稀 暫若尋常見

⑩幽会未終魂已斷 半衾如煖人猶遠

⑩夢覺高唐雲雨散 十二巫峯

隔斷相思眼 不爲旁人移步懶

爲郎憔悴羞郎見 青翼不來孤鳳怨

路失桃源 再會終無便

舊恨新愁那計遣 情深何似情俱淺

碧沼の鴛鴦 頸を交へて舞ひ 正に双棲に恁りて

又遣はし分かれて飛び去る 翰を灑つて贈言するも 終ひに許さず
琴を授りて訴へ尽くす 奴の心素 曲未だ声を成さざるに 先づ怨慕し

涙を忍び 情を凝らす 強ひて霓裳の序を作す

離愁悽咽の処に弾き到れば 絃腸 俱に断つ 梨花の雨

別後の相思 心目乱れ 芳音を謂はず

忽ち南來の雁に寄す 却つて花牋に写して 涙と和に巻き
細かに方寸を書きて 伊をして看しむ 独寐の良宵 遣るを計る無く

夢裏 依稀として 暫く尋常に見ゆるが若し

幽会 未だ終らざるに 魂已に断たれ 半衾煖むる如きも 人猶ほ遠し

夢は高唐に覚めて 雲雨散じ 十二の巫峰

隔斷す 相思の眼 旁人の爲ならず 歩を移して懶く

郎の爲に憔悴すれば 郎の見るを羞ず 青翼来たらず 孤鳳怨み

路は桃源に失はれて 再會 終ひに便無し

旧恨新愁 那ぞ遣はずを計らん 情深くして 何ぞ情の俱に浅きに似ん

以上十首の「蝶恋花詞」は崔鶯鶯と張生の恋愛を題材とする西廂故事を完全に演出するものである。ここまで書き終わったところで、趙令時は自分の気持ちをもまだ十分に言い尽していないとして、また「後記」という散文を書き加えた。その中で趙令時は、「崔の始め相得て終りに相失ふに至る、豈に已むを得ざるかな」という見解を示し、鶯鶯が無辜の被害者であるとする。そして全篇の最後「尾声」（即ち第⑫首）において、趙令時は棄てられた鶯鶯に心からの同情を寄せると同時に、張生の薄情さと残酷さを厳しく非難するのである。

⑫鏡破人離何處問 路隔銀河

歲會知猶近 只道新來銷瘦損

玉容不見空傳信 棄擲前歡俱未忍

豈料盟言 陡頓無憑準

地久天長終有盡 綿綿不似無窮恨

鏡破れ 人離れて 何れの処に問はん 路は銀河に隔たるも

歲會 猶ほ近きを知る 只だ道ふ 新來瘦損を銷し

玉容 見えず 空しく信を伝ふ 前歡を棄擲して 俱に未だ忍はず

豈に料らんや 盟言 陡頓に憑準無きを

地久しく天長きも 終ひに尽くる有り 綿綿として 無窮の恨みに似ず

以上述べてきたことにより鑑みるに、「商調蝶恋花」に次の特徴を見出すことができよう。

(一)、「鶯鶯伝」に比べて、作者の観点が鮮明であり、故事の内容が充実している。趙令時は「鶯鶯伝」の内容を概括する時に、原作中の張生の「忍情の辯」と元稹の「補過の辞」という「煩褻」な文字を削り去り、また「遺棄」を「善補過」と見なし、「薄情」を「忍情」と言いなす元稹の立場をきっぱり捨て去ったのである。また、一方で崔、張二人の「始め相得て終りに相失ふに至る」という悲劇の結末に対して、これを深く惜しむ気持ちを打ち出している。ここには、「商調蝶恋花」の主題の時代性と進歩性をはっきりと示されていると言えよう。これは、秦觀と毛滂の「調笑軼踏」など類似作品と比較すれば、さらに内容の充実と叙述の完備という点において、作品としての著しい進歩と完成の跡が窺われるのである。

(二)、形式が整い、その表現も実に優れていて、生き生きとした描写が展開されるのである。全篇が鼓子詞という形式を用いて、説と唱、すなわち散文と韻文相交差して形成される。宋代は、詞の繁栄時期と言われ、また宗室文人である作者趙令時はすぐれた文学素養を持っており、作品中にはすばらしい詞句が散見する。例えば、第⑤

首の「惆悵空回誰共語、只應化作朝雲去」、第⑥首の「人去月斜疑夢寐、衣香猶在妝留臂」及び第⑨首「幽會未終魂已斷、半衾如煖人猶遠」という詞句は作者自身の感情が実に巧みに表現されていると言えよう。また、特に鶯鶯のイメージについて詠じた「黛淺愁深妝淡注、怨絶情凝、不肯聊回顧」や「彈到離愁悽咽處、絃腸俱斷梨花雨」といった句は、最もその対象を生き生きと描き出した部分であり、読者を強く感動させるのである。

趙令時は元稹の「鶯鶯伝」に基づきながら「鼓子詞」というジャンルを採用し、独自の見解によつて「商調蝶恋花」という宋代のすぐれた文学作品を生み出した。この作品は、その当時にあつた西廂故事というものを士大夫階層にとどまらず、庶民娯楽の場所にまで上演に供することを可能にした。しかも、その形式と内容の特徴および成功度から見ると、この作品が西廂故事の演變の中において重要な役割を果たし、特に「董西廂」、「王西廂」及び後世の戯曲への道を開いたということが言えると思われる。従つて、「西廂記は趙德麟商調蝶恋花より出ず」や「戯曲の祖」などと論じられるのは、あながち過褒の辞とは言えないのである。

おわりに

本稿に於いては、趙令時「商調蝶恋花」及び秦觀、毛滂「調笑軋踏」という作品をめぐつて、宋代に於ける西廂故事の流伝と蘇軾の役割について考察してきた。これを要するに、蘇軾は北宋文壇の盟主として、彼の卓絶した文学創作の才能をもつて、宋代における文学の各種ジャンルに対して甚大な貢献をしたが、西廂故事の流伝と発展についても、重要な役割を果たしたと思われる。これは、宋代文人間の師承交遊関係について、一つの興味ある新しい研究課題ではないかと思われる。従来より、歐陽脩、蘇軾らは文壇の盟主として、彼らは文人学士と結びつき、多くの門生後輩を抜擢し、当時の文学の発展に大きな役割を果たしてきたことは周知の事実となっている。しかし、西廂故事の流伝と発展についても、まさに同様の事実が検証されたのである。

「西廂記」文学の研究は、中国文学に於ける、一つの重要な研究テーマである。以上の考察により、伝奇小説から講唱文学、そして戯曲芸術という流れを見ると、北宋趙令時の「商調蝶恋花」は、まさに前を承けて後を啓き、

特に「董西廂」、「王西廂」及び後世の戯曲に大きな影響を及ぼした作品であったことがわかる。従って、元雜劇「西廂記」そのものの研究以外にも、西廂故事の流伝と發展及びこういつた作品について、検討すべき課題が少なくない。本稿は、その様な課題に取り組んだ試論であり、今後もこの分野についての一層の研究に励みたいと思う。

注

- (1) 「南歌子」：笑怕蕃薇繡、行憂寶瑟僵。美人依約在西廂。祇恐暗中迷路、認餘香。 午夜風翻幔、三更月到牀。簾紋如水玉肌涼。何物與儂歸去、有殘妝。(龍榆生編『東坡樂府箋』卷三 商務印書館 一九三六年)
- (2) 「雨中花慢」：遼院重簾何處、惹得多情、愁對風光。睡起酒闌花謝、蝶亂蜂忙。今夜何人、吹笙北嶺、待月西廂。空悵望處、一株紅杏、斜倚低牆。 羞顏易變、傍人先覺、到處被著猜防。誰信道、些兒恩愛、無限淒涼。好事若無間阻、幽歡卻是尋常。一般滋味、就中香美、除是偷嘗。(同(1))
- (3) 「定風波」：莫怪鴛鴦綉帶長、腰輕不勝舞衣裳。薄倖只貪游冶去。何處、垂楊系馬恣輕狂。 花謝絮飛春又盡。堪恨、斷弦塵管伴啼妝。不信歸來但自看。怕見、爲郎憔悴却羞郎。(同(1))
- (4) 「張子野年八十五、尚聞買妾、述古令作詩」：錦里先生自笑狂、莫欺九尺鬢眉蒼。詩人老去鴛鴦在、公子歸來燕燕忙。 柱下相君猶有齒、江南刺史已無腸。平生謬作安昌客、略遣彭宣到後堂。(『蘇軾詩集』卷十一 中華書局 一九八二年)
- (5) 『宋史·文苑傳六·黃庭堅』：「與張耒、晁補之、秦觀俱游蘇軾門、天下稱爲四學士。」
- (6) 清·錢謙益『蘇門六君子文粹』序：「六君子者、張耒文潛、秦觀少游、陳師道履常、晁補之無咎、黃庭堅魯直、李廌方叔也。」(『四庫全書』集部總集類)
- (7) 瓦子には宋、元代の時に各種の演藝を上演した場所であり、勾欄は宋、元の時に官妓が雜劇を上演したところである。
- (8) 『張耒集』卷五十四「書趙令峙字說後」：「蘇公既謫嶺外、其所厚善者往往得罪、德麟亦間廢且十年、其平生與公往還之跡、宜其深微而諱之矣。而德麟不然、寶藏其遺墨餘稿、無少棄捨、此序其甲也。予問其意、德麟慨然曰、(此文

- 章之傳者也、不可使後人致恨于我。予曰、此正先生所謂「篤行而剛、信于爲道」者歟？」（中華書局 一九九〇年）
- (9) 『蘇軾文集』卷十一「趙德麟字說」：「得其爲人、博學而文、篤行而剛、信於爲道、而敏於爲政。予以爲有杞梓之用、瑚璉之貴、將必顯聞於天下、非特佳公子而已。」
- (10) 『山房集』卷八：「趙令時、宗室近屬、猶子好學有詩聲、著侯鯖錄行於世。元祐六年簽判穎上、東坡出守、愛其公姓而有文、一見待以文士、賦詩飲酒嘗令屬和、別去懷思形於篇詠、字之曰德麟、其後張文潛書字說、謂德麟與韓子蒼諸人名振一時。東坡領郡時、表上其才、明年去穎、又力薦之、至器其人爲清廟之寶。東坡既謫、德麟亦坐廢十年。」
- (『四庫全書』集部別集類)
- (11) 久保得二『支那戲曲研究』第六五頁（弘道館 昭和三年）
- (12) 『侯鯖錄』は趙令時が書いた故事と詩話の專集であり、『稗海』第八函、『知不足齋叢書』第二十二集、『四庫全書』子部小說家類、『叢書集成初編』文學類、『筆記小說大觀』第六輯に收録されている。
- (13) 況周頤『蕙風詞話』卷一「詞用詩句曲用詞事」：「金元人製曲、往往用宋人詞句。關漢卿、王實甫西廂記出於趙德麟商調蝶戀花、其尤著者。」（唐圭璋編『詞話叢編』第五册第四四一九頁 中華書局 一九八六年）
- (14) 王國維「戲曲考源」：「德麟此詞毛西河詞話已視爲戲曲之祖。」（『王觀堂先生全集』册十四 文華出版公司 一九六八年）